

様式1

令和6年度学校評価報告書
渋谷区立笹塚中学校

令和6年度 学校評価報告書

令和7年2月12日
渋谷区立笹塚中学校

(1) 新たな学びの実現

【ア】 自己評価

重点目標		①生徒の学ぶ意欲を醸成する。 ②ICT を効果的に活用した学び合いのある授業を推進する。 ③探究的な学びのある総合的な学習の時間（シブヤ未来科）を充実させる。			
評価指標		取組内容（具体的に）	評価	成果	評価
①	・アンケートにおいて「自ら進んで学習に取り組んでいますか。」を 80% 以上とする。 ・家庭学習の習慣がない生徒の割合を 0% とする。	・生徒が興味や関心をもって、主体的に学ぶことができるように働きかけ、特に国語、数学、英語については、学習者用デジタル教科書を活用した。 ・放課後の学び「スタディーズカフェ」として図書室を開放した。	B	アンケート結果において、「自ら進んで学習に取り組んでいますか。」と回答した生徒は 80% を超えていた。しかし、家庭学習を全くしていないと回答した生徒が 7.1% いた。都平均が 6.0% であるため家庭学習へつなげる工夫を一層工夫・充実する。	B
②	・アンケートにおいて「タブレット端末の効果的活用」について肯定的な回答を 80% 以上とする。 ・アンケートにおいて「協働的・対話的な学びの授業の実践」について肯定的な回答を 80% 以上とする。	・生徒がタブレット端末を自在に使いこなすことができるよう、授業中はもちろん、生徒会活動など様々な場面で活用できるよう、指導方法を工夫した。	B	アンケートにおいて「タブレット端末の活用」「協働的・対話的学び」「個別最適な学び」はいずれも 80% を超える肯定的回答を得ている。今後は、AI ドリル等を活用した個別最適な学びを一層充実する。	B
③	・アンケートにおいて、「シブヤ未来科の学習を推進している」について肯定的な回答を 80% 以上とする。	・「シブヤ未来科」において、多くの情報から何が必要で大切かを判断し、他者と協働しながら問題を解決し、新たな解決策や価値を生み出すことができるよう授業を展開した。	B	アンケートにおいて肯定的な回答が 80% を超えた。初年度ということもあり「探究基礎」を丁寧に実践し、協働的な学びを推進しながら自分の問いを見付ける学習を展開した。今後も「My 探究」が充実するよう新たな学びを推進する。	B

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

【イ】 学校関係者評価

取組に対する評価	成果に対する評価	学校関係者委員会の見解について
A	A	ICT 活用について保護者の理解を同時に進めて事業を推進することが望ましい。

学校の自己評価は、A=適正である B=おおむね適正である C=適正ではない

(2) 安心・安全に挑戦できる環境

【ア】 自己評価

重点目標		①いじめ問題への意識を高くし、未然防止に努める。 ②すべての生徒が、安心して挑戦できる環境づくりを構築する。 ③自分の人権を守り、他者の人権を守るための実践行動ができる。			
評価指標		取組内容（具体的に）	評価	成果	評価
①	<ul style="list-style-type: none"> いじめ対応に関するアンケートにおいて、肯定的な回答を 80%以上とする。 いじめのない安心して通学できる学校づくりを目指す。 	<ul style="list-style-type: none"> いじめ防止に関する授業を展開するとともに、校内委員会において ICT を活用した情報共有を行い、組織的に対応した。 いじめアンケート・生活アンケートを隔月実施し、聞き取りを随時行った。また、いつでも相談できる教育相談体制を構築した。 	B	アンケートでは肯定的な回答が 60%超となり、いじめ対応に関する周知や理解が不足していた。教職員研修を充実させ、小さなトラブルにも丁寧に対応し、組織的な対応を実践した。今後は学校 HP 等を活用し、周知や理解を徹底させる。	C
②	<ul style="list-style-type: none"> アンケートにおいて「安心して学習に取り組める」の肯定的な回答を 90%以上とする。 不登校の生徒の状況を把握するとともに、適切な支援を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒間のコミュニケーションを促進し、互いに尊重し合うことができるよう、グループや班での協働的な活動を取り入れた。 不登校対策委員会を開催し、個々の生徒の現状把握、対応方法について、組織的に対応した。 	A	アンケートでは肯定的な回答が 80%超であった。不登校対策委員会を開催し、クラウドを活用したことで、瞬時に情報を共有し、関係機関等につなげることができた。教育活動全般を通して、生徒の自己肯定感を育む取組を実践し、自尊感情尺度に関するすべての項目が、都の結果よりも上回った。	A
③	<ul style="list-style-type: none"> 学校全体として人権尊重の視点に立った学校づくりを組織的かつ効果的に推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 「生徒の自尊感情を高める指導の充実」を通して、誰一人取り残さない教育活動を展開した。また、地域の行事に積極的に参画し、学校と地域が協働して、自他ともに大切にしようとする態度を育んだ 	A	生徒同士の協力や支え合いの精神が醸成され、学校が安心して学べる環境へと改善された。また、生徒が異なる価値観や文化を尊重する姿勢を学び、多様性に対する理解が一層深まった。自己表現する機会が増えたことで、生徒が自分の考えや感情を適切に伝えるスキルが向上し、教師との信頼関係が強化された。	A

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

【イ】 学校関係者評価

取組に対する評価	成果に対する評価	学校関係者委員会の見解について
A	B	学校と家庭が連携・協力して取組むことが必要不可欠であると考えている。

学校の自己評価は、A=適正である B=おおむね適正である C=適正ではない

(3) 校務DX (働き方改革)

【ア】 自己評価

重点目標		①校務 ICT 化の推進による教職員の負担軽減 ②会議等の精選と意識改革 ③ペーパーレス化の推進			
評価指標		取組内容 (具体的に)	評価	成果	評価
①	アプリを活用した学校だよりの配信などを充実し、印刷業務等を軽減することで、生徒指導や教科準備などの時間を確保する。	学校や PTA からのお知らせは原則、Home&School を使って配信した。また、校内の連絡事項も Teams を活用したデータ配信を徹底した。	A	ICT を活用することで集計業務等の負担が軽減した。また、アプリによる欠席連絡が定着し、勤務時間前の電話対応が軽減した。学校からの配信を確実に全員受信してもらうための周知と協力を、継続的に行う。	A
②	・職員会議を実施しないため、運営委員会における報告を、全教職員が理解する。 ・TLD において、教員の学びの機会を確保する。	・参加していない会議については、教員が主体的に情報取得に努めるとともに学年の会議において周知した。 ・新たな学びの推進や ICT 教育推進校としての取組を継続的に実践した。	B	・会議を精選したり、時間内で会議をしたりすることで生まれた時間は、研修会や教材研究、生徒会活動等に活用された。 ・クラウドを活用した共同編集機能を活用し、自分の考えをより良いものへ変容させる対話的な学びの実践ができた。	B
③	・生徒、保護者のペーパーレスの意識を定着させ、アンケート結果の肯定的評価を 80%以上とする。	・学校だよりや保護者へのお知らせ等は Web サイトを活用して発信した。 ・議案書や発表原稿等の作成に ICT を活用し、タブレットを読み原稿とした。	B	「ペーパーレス化」に関するアンケート結果の肯定的評価は 95%超であった。ペーパーレス化により、アンケート回答率の減少や周知徹底が課題である。	A

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

【イ】 学校関係者評価

取組に対する評価	成果に対する評価	学校関係者委員会の見解について
A	A	ペーパーレス化は定着したが、周知徹底には様々な工夫を凝らす必要がある。

学校の自己評価は、A=適正である B=おおむね適正である C=適正ではない

(4) 家庭・地域との協働

【ア】 自己評価

重点目標		①学校運営協議会との連携と協働 ②保護者との連携強化 ③社会に開かれた教育課程の実現			
評価指標		取組内容（具体的に）	評価	成果	評価
①	・「学校運営協議会」についてのアンケートにおいて肯定的な回答を80%以上とする。	・学校運営協議会を年6回開催した。 ・学校への具体的な支援や意見についてすぐに校内で共有し、情報発信に努めた。 ・協議内容を教職員及び保護者、地域に学校だよりを活用して周知した。	B	アンケートにおける肯定的評価は60%未満であった。今年度は7月に、地域住民と教職員との熟議を行い、課題について討議をすることにより、互いの立場や果たすべき役割への理解が深まった。次年度は保護者の参画を促すことで、当事者意識をもって教育に関わることができるようにする。	B
②	・「家庭・地域の理解と協力を得た教育活動」についてのアンケートにおいて肯定的な回答を80%以上とする。	学校ホームページなどを利用して生徒の取組や功績を報告した。行事ごとにアンケート機能を活用して保護者からコメント入力してもらい、日頃から保護者との連携を強化し、良好な関係づくりに努めた。	B	アンケートにおける肯定的評価は80%未満であった。特に、ホームページの学校日記を随時配信するなど情報提供に努めた。しかし、情報提供は一方通行になりやすいため、家庭からも発信できる環境を構築したい。	B
③	・「地域との連携」についてのアンケートにおいて肯定的な回答を80%以上とする。	・町民大運動会、地域防災訓練、笹塚フェスティバルにボランティアによる生徒が主体的に参加した。	B	アンケートにおける肯定的評価は80%程度であった。生徒の主体的な参画により、地域へ貢献することができた。今後は、「シブヤ未来科」の中で、地域貢献の取組を実現し、持続可能な取組みにさせる。	B

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

【イ】 学校関係者評価

取組に対する評価	成果に対する評価	学校関係者委員会の見解について
A	A	地域の回覧板や掲示板の活用も視野に入れて発信することも検討の余地がある。

学校の自己評価は、A=適正である B=おおむね適正である C=適正ではない

(5) 特色ある教育活動

【ア】 自己評価

重点目標		①教育活動における ICT の活用を推進する。 ②デジタル・シティズンシップ教育の充実を図る。 ③日本の伝統的な文化「稲作体験」を実践する。			
評価指標		取組内容（具体的に）	評価	成果	評価
①	・「情報活用能力の育成のための ICT 活用」に関するアンケートにおいて肯定的な回答を 90%以上とする。	・個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実につながるクラウド活用をした。 ・生徒自らがクラウドを活用し、主体的に取り組む特別活動を実践した。	B	アンケートにおける肯定的な回答は 80%であった。ICT を活用することで、生徒は興味のある分野を深く掘りさげることができ、主体的な学びが促進した。生徒は情報の取捨選択やインターネット上のリスクを理解し、情報社会を生き抜く力を養うことができた。	B
②	・「デジタル・シティズンシップ教育」「メディア活用」に関するアンケートにおいて、肯定的な回答を 90%以上とする。	・年度当初に「SNS ルール」「タブレット活用ルール」を周知した。 ・いたずらや逸脱行為を放置せず即応することを基本とし、教科等でデジタル・シティズンシップの要素を与えることで、協働や共有を円滑に進めた。	B	アンケートにおける肯定的な回答は 80%を超えた。適切なコミュニケーション方法や、他者への配慮を学び、デジタル社会の一員として自覚をもち、責任ある行動をとることができるようになってきた。今後も、一層家庭と連携して取組んでいく必要がある。	B
③	・「家庭・地域の理解と協力」「学校の特色」に関するアンケートにおいて、80%以上とする。	・調布農園、地域、PTA、おやじの会と連携し年間を通して実践する。 ・1年生はもみ蒔き、田植え、2年生は稲刈り、3年生は餅つきを実践する。	B	アンケートにおいて、どちらの項目もほぼ 80%程度であった。特に、稲作体験活動を持続可能なものにするためには、保護者の参画や協力が不可欠である。今後も、学校行事の周知と理解を深めることができる企画を検討する。	B

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

【イ】 学校関係者評価

取組に対する評価	成果に対する評価	学校関係者委員会の見解について
A	A	稲作体験など保護者と一緒に考え、学校運営を進めることが必要である。

学校の自己評価は、A=適正である B=おおむね適正である C=適正ではない